

老年看護学実習における事前に提供された受け持ち患者情報を活用した演習取り組みの効果
－受け持ち患者情報から見つける看護の視点－

佐藤美恵子 荒木美千子 佐藤サツ子

**The effect of exercise initiatives that utilize patient information matters
in one's charge that have been provided in advance of the first
gerontological nursing practice session**

－From the point of view of nursing to find patient information matter in one's charge－

Mieko SATO, Michiko ARAKI, Satsuko SATO

要旨：本研究は、実習初日に取り組んでいる学内演習の学習効果を明らかにすることである。老年看護学実習を終了した学生を対象に①演習終了直後の学びや気持ちの変化と②実習終了後に演習が実習全体にどう活かされたのかや気持ちの変化についての記述を求め分析した。演習終了直後では、【イメージすることにより広がる看護の視点】【実習への原動力】【自己学習の深まり】【実習に向けた心の準備】【対象を捉えようとする力】の5つのカテゴリーが抽出された。実習終了後では、【イメージと実際のギャップからの学び】【イメージを活用したケアの実践】【心構え・意欲】【演習経験の実習での活用】【事前学習への取り組み】【高齢者とのコミュニケーションへの活用】の6つのカテゴリーが抽出された。実習初日、病棟に行く前に受け持ち患者の状況や援助場面を具体的にイメージし実践できたことは、対象理解に留まらず、実習に向けての心の準備や原動力となったといえる。また、病棟で患者と出会い、事前に提供される限られた情報から患者をイメージすることへの限界と現実とのギャップを踏まえ、必要な情報の追加や修正をしつつ、対象理解のための能動的な学習行動への動機づけになったと考えられる。演習の成果として、演習の目標は概ね達成されたといえるが、対象である高齢患者のリアリティを高めていくなど演習環境を整える必要性が示唆され、今後の課題といえる。

キーワード：老年看護学実習、演習、教育方法、評価

Abstract: This study was conducted to clarify the learning effects of practical training used on the first day of a gerontological nursing practice session. We analyzed data obtained from students' writing concerning their own "change of heart" attitudes pertaining to what effect the training session had on them after completing the session. Five categories were analyzed: preparation in advance for the session, motivation and initiative to achieve the targeted goal of the practice session, deepening of self-learning as a result of the practice session, practical care utilized by pre-conceived images of what the practice session would entail, and learning from the gap between pre-conceived images and practical utilization. In addition to these categorical analyses, we ascertained additional data regarding students' concrete imagined situations in aiding patients and their responsibilities towards their elderly patients prior to the first practice session. How well the students achieved their target goals from the session and what was the driving force behind the preparation and mind set towards the practice session. Also, based upon the gap between the reality presented by the session and the limits that were met with the patients in the ward from limited advanced information provided, was analyzed. Additions and corrections pertaining to necessary understanding of target goals of the session to improve learning behavior was also extracted. Although the result shows that the aim of the nursing practice was attained, the need for providing more detailed information of the patients to students prior to the training was suggested.

key words: gerontological nursing practice, maneuver, education method, evaluation

I. はじめに

臨地実習は、既習学習を基に対象の個別性に合わせて看護を実践する場である。老年看護学実習では、65歳以上の高齢者を対象に加齢による変化という高齢者に共通する視点と、対象者の個性を踏まえた視点を総合的にとらえ看護を展開することが必要である。しかし、核家族化の背景や高齢者と触れ合う機会が少ない状況にある看護学生にとって、加齢による変化や日常生活の状況を踏まえて対応することは困難なことが多い。更に、高齢者の多くは複数の慢性疾患を有するため、機能障害への影響を把握するにはかなりの時間を要する。そこで、少しでも患者の状態を早期に捉え、看護を展開していけるよう、実習前段階として受け持ち患者のイメージ化を図る学習の必要性を考えた。中でも演習を取り入れることは、既習学習と実習とを結びとともに学生が新しい発見を得られる機会となるため意義は大きい。

演習方法の一つとしてロールプレイングがある。ロールプレイングは、対象のイメージ化が可能となり、対人関係や患者の対応について理解が深まること^{1) 2) 3)}や、自身の看護技術を見直す機会となること⁴⁾の効果が期待できることが報告されている。また、患者役・看護師役を体験し看護援助を実施することで、より高齢者の立場に立った看護援助が考えられること⁵⁾の効果も期待でき、ロールプレイングによる相互関係から高齢者の理解を深められると思われる。しかし、高齢者を看護する上で必要な視点を加えて看護技術の演習をすることでの学習効果はあると言われているが、高齢者の特徴を想定した看護技術の方法⁴⁾や、臨地実習のような臨場感の高揚が課題としてあげられており¹⁾、いかに高齢者という視点を踏まえてリアリティのある演習を行うかが重要と思われる。

そこで、実際の受け持ち患者の情報を演習事例として活用しロールプレイングする演習を計画した。実習初日の学内演習として実施することで、実習直前に受け持ち患者の看護の方向性や自己の学習課題を明確にし、それを踏まえながら実習を進めていくことで、実習中も自分自身の看護を振り返りながら自己の目標に向かって取り組んでいくことが期待できると考えたからである。

II. 研究目的

臨地実習指導者より事前に提供される受け持ち患者に関する情報から、対象の特徴や日常生活状況をイメージ・想定し、学生同士が役割交替をして演習・評価・学習課題を明確にするというプロセスにおいて、老年看護学実習の準備段階における演習取り組みの学習効果について検討する。

III. 研究方法

1. 老年看護学実習における演習の概要

老年看護学実習4単位(4週間)は、介護老人保健施設・介護老人福祉施設などで1週間実施する実習と、医療施設で1名の高齢者を3週間受け持ち看護過程の展開をする実習とで構成されている。本演習は、医療施設における実習の一環として実習初日に実施している学内演習である。この演習は、臨地実習指導者から事前に提供される受け持ち患者に関する情報という限られた患者情報から、独自のワークシートを活用して、受け持ち患者の状態や日常生活状況をイメージすることで、必要な援助場面を自分自身で想定しながら手順や留意点を考える。その後、学生同士が看護者役と患者役になり役割交替をしながら実施・評価し、受け持ち患者の看護の方向性と実習に向けての自己の学習課題を明確にし、その内容を踏まえながら実習を進めていくというものである。臨地実習指導者へは、事前に研究および演習の主旨を説明した上で具体的な記載例を提示し、情報提供をしていただいている。

表1 演習『受け持ち患者情報から見つける看護の視点』の概要

1. 目的・目標

目的

実習前に受け持ち患者の状態を想定し、援助場面の一部を実演することでその後の看護の方向性と事前学習課題を考えることができる。

目標

1. 事前に得られた受け持ち患者の情報を整理し、援助の際、配慮・工夫する点について考えることができる。
2. 患者の情報から患者の状態や必要な援助場面を想定し、手順や留意点を考えることができる。
3. 自身の受け持ち患者の状態をペアの学生に説明し、必要な物品を用いて援助することができる。
4. 援助場面の評価から、受け持ち後の看護の方向性、事前学習課題について考えることができる。

2. 演習内容【所要時間】

1) 受け持ち患者情報の整理・演習の準備【130分】

- ①文献等を活用し、「受け持ち患者 ワークシート NO1」に沿って受け持ち患者の情報を整理し、必要と思われる援助場面を想定する。
- ②受け持ち患者の状態を想定した演習計画を立て、必要物品の準備をする。

2) 想定した援助場面の実演および評価【75分】

- ①二人1組となり、看護者役・患者役と役割交替をしながら想定した場面を実演する。【1名30分×2名=60分】
 - ・看護者役は受け持ち患者の状態やADLの状況が分かるように患者役の学生に説明し、設定場面の説明後「受け持ち患者 ワークシート NO1」に沿って実演をする。
 - ・患者役は、患者の状態やADLの状況など、看護者役の学生から受けた説明内容を踏まえて演じる。
- ②実演後に、感想および援助を受けてどうであったか等お互いに意見交換をし、「受け持ち患者 ワークシート NO2」を記載し、学習内容を整理する。【15分】

3) 演習の振り返りを行いまとめとする。【45分】

表2 受け持ち患者に関する情報用紙の記入例

記入例

受け持ち患者に関する情報

学生氏名	患者氏名	年齢	性別	病室番号	入院年月日	疾患名 (主要症状・機能障害等) ※認知機能、視覚、聴覚の視点も含む	治療方針・処置・ 主な使用薬物など ※手術の場合、手術日・術式も	現在の状況やその人らしさを捉えるために必要な 援助の視点(ADL、安静度、看護方針等) ※食事、排泄、清潔、運動/活動・移動、睡眠、コミュニケーション等 ※医療的に必要な安静度・看護度
	ふりがな 〇〇 〇〇様		男性 <div>女性</div>	〇〇号室	H〇年 〇月〇日	脳梗塞 左不全麻痺 見当識障害、右難聴あり 右膝関節症のため、時々疼痛の訴えがある	手術日・術式 毎日〇時頃リハビリ (PT・OT・ST) 毎朝インスリン注射	食事：一部介助にて経口摂取(〇〇食) 排泄：介助にて日中は車椅子用トイレ、夜間はポータブルトイレを使用 清潔：介助にて清拭、シャワー浴(週2回) 運動/移動：日中は臥床していることが多い。 車椅子への移動は介助を要する。 睡眠：睡眠薬を内服しているが目覚めていることもある コミュニケーション：構音障害はあるが会話可能 安静度：制限なし 看護方針：〇〇〇〇〇

図1 受け持ち患者ワークシート

受け持ち患者 ワークシート No1

学籍番号： 氏名：

患者氏名(イシタ)：	疾患名(主要症状・機能障害等)	治療方針・処置・看護の方向性
年齢：		
性別：		
入院月日：		
(ADLの状況(食事,排泄,運動/活動,睡眠,コミュニケーション,安静度等))	[ある疾患やADL等の情報から考えられる日常生活への影響や援助で配慮・工夫が必要と思われること (ADLの項目ごとに整理をする)]	

↓

【ロールプレーストーリー】	
【必要物品・援助内容】	【患者の状態を踏まえて配慮・工夫したい点】

受け持ち患者 ワークシート No2

学籍番号： 氏名：

【実施しての感想・評価】
【援助を受けた学生からの感想・評価】
【観察者の感想・評価】
【演習後に見えてきた看護の方向性・事前学習課題、不足している情報・得たい情報等】

図2 演習レポート用紙①②

「老年看護学実習における事前に提供された
受け持ち患者情報を活用した演習取り組みの効果」の研究に関するレポート①

●演習①「受け持ち患者情報から見つける看護の視点」を実施して、明日からの実習に向けて感じる自分に起きた変化について教えてください。

●レポートの活用について当てはまる項目を○で囲んで下さい。
研究の資料として (活用してよい ・ 活用しないでもいい)

* レポートは、無記名ですので学生名は特定されません。また、レポートの内容は科目の成績には関係ありません。配布した封筒（無記名）に入れ封をして提出をお願いいたします。

ご協力ありがとうございました

「老年看護学実習における事前に提供された
受け持ち患者情報を活用した演習取り組みの効果」の研究に関するレポート②

●事前に演習①「受け持ち患者情報から見つける看護の視点」をすることが、実習での患者との関わりや援助にどのような影響をもたらしましたか。

●レポートの活用について当てはまる項目を○で囲んで下さい。
研究の資料として (活用してよい ・ 活用しないでもいい)

* レポートは、無記名ですので学生名は特定されません。また、レポートの内容は科目の成績には関係ありません。配布した封筒（無記名）に入れ封をして提出をお願いいたします。

ご協力ありがとうございました

2. 調査対象および調査期間

平成23年度後期から平成24年度前期に老年看護学実習を履修した看護学生110名を対象に、平成23年10月～平成24年6月に実施した。

3. 調査方法

演習終了直後（レポート①：演習を実施して、明日からの実習に向けて感じる自分に起きた変化について）と、実習終了後（レポート②：演習をすることが、実習での患者との関わりや援助にどのような影響をもたらしたか）の2回に渡りレポートを提出してもらった。

4. 分析方法

提出されたレポート①の内容から演習終了直後の学びや気持ちの変化について、レポート②の内容から実習終了後に演習が実習全体にどう活かされたのかや気持ちの変化について1文節を文脈単位とし、意味内容の類似性に従って整理・分類し、サブカテゴリー、カテゴリーと抽象度を高めた。得られたカテゴリーについては、研究者間で合意が得られるまで検討を重ね、妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

本研究センター倫理審査委員会の承認を得た後、対象者には研究目的、方法、無記名であり成績には関係ないこと、結果は研究の目的以外には使用しないこと、学会発表等での公表・教育の場で役立てたい旨口頭および文書で説明した。また、レポート提出にあたっては、レポート用紙に記述した内容を研究活用することの是非を問う項目を設け、個人が特定されないよう封筒に封をして回収した。

V. 結果

同意が得られたレポート①86件、レポート②66件を分析対象とした。【 】はカテゴリー、『 』はサブカテゴリー、「 」はレポートへの記載内容を示す。

1. 実習終了直後の学びや気持ちの変化

（表3）

【イメージすることにより広がる看護の視点】
【実習への原動力】
【自己学習の深まり】
【実習に向けた心の準備】
【対象を捉えようとする力】の5つのカテゴリーが抽出された。

【イメージすることにより広がる看護の視点】では、「患者の状態やどんな援助が必要か想像し行ったことでイメージを明確化することができ

た」など『患者の全体像、援助場面、具体的なケアのイメージ化』（21件）や、「ADLの状況を想定しいろいろなパターンを考え演習できた」ことで『援助方法を創意工夫する学習取り組み』（17件）を学ぶことができていた。実際に行うことで、『患者像をイメージすることで見える具体的な関わり（個別性に配慮した関わり）』（5件）だけではなく、「技術も大切だが、患者の気持ちをもっと考えた援助を行いたい」など、『患者の立場に立った援助の視点』（4件）につながっていた。また、『実習に対するイメージ』（2件）がわき、『既習学習の想起』（2件）、『想像力』（1件）、『想定して捉える必要性』（1件）を学んでいた。

【実習への原動力】では、「何が不足で何の情報を得たいのか明確になった」ことや、「どんな情報を収集したら良いか具体的に見えてきた」ことが『実習への動機付け・心構え』（16件）になり、「どんな患者さんだったとしても、臨機応変に対応することができるのではないかと自信が持てた」など、演習を実施したことが『自信』（3件）につながっていた。更に、「まだ不安だけど、イメージがついたことによって頑張ろうと思えるようになった」「明日から受け持ち患者とも会うので頑張っていきたい」という『学習意欲の向上』（19件）や「想像しながら演習することで、相手のことを知りたいと思うようになった」など、『受け持ち患者への興味関心』（3件）を感じた学生もいた。

【自己学習の深まり】では、演習により「何が課題で不足な知識は何なのか分かった」「受け持ち患者の情報を踏まえた病態生理の確認や、想定をして技術演習を行うと自分の課題が明確になり自己学習しやすい」など『自己の学習課題の明確化』（26件）ができ、更に「事前学習が深まった」「予測されること、必要なことの学習ができた」など『自己学習の深まり』（3件）を実感することができていた学生もいた。

【実習に向けた心の準備】では、演習をしたことで「患者へどのように接し、援助を行うのが良いのかが分かり不安が軽減された」など『ケアのイメージ化による不安の軽減』（4件）と、「患者との出会いに対し不安や緊張が出てきた」など『受け持ち患者と出会うことへの緊張』（1件）、「実習が始まる、患者さんを受け持たせていただくという責任感が出てきた」と受け持つことの『責任感』（1件）を感じる学生もいた。

表3 演習終了直後の学びや気持ちの変化 (総件数：134)

カテゴリー	サブカテゴリー	レポートへの記載内容
イメージすることにより広がる看護の視点 (53)	患者の全体像、援助場面、具体的なケアのイメージ化 (21)	<ul style="list-style-type: none"> ・受け持ち患者に起こりうるリスクや症状、状態など様々なことをイメージして考えていくことができた ・患者の状態やどんな援助が必要か想像し行ったことで、イメージを明確化することができた ・疾患について学習するだけでなく、受け持ち患者のイメージができた ・具体的にイメージでき、疾患を意識した援助を実施するうえで、気をつけなければならない点が想像できた
	援助方法を創意工夫する学習取り組み (17)	<ul style="list-style-type: none"> ・情報は十分でないため、想像を膨らませて援助方法を変えるなど考えながら行うことができた ・ADLの状態を想定しいろいろなパターンを考え演習ができた ・予想できるアクシデントやもっとADLが拡大しているのでは？と想像を膨らませることができた
	患者像をイメージすることで見える具体的な関わり（個別性に配慮した関わり）(5)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で受け持つことを決めた患者さんをどうケアしていき、明日からどう関わっていくかを具体的に思い浮かべることができた ・イメージがわき、更に良い方法があるのではないかと考えるようになった
	患者の立場に立った援助の視点 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・技術も大切だが、患者の気持ちをもっと考えた援助を行いたい
	実習に対するイメージ (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・実習のイメージがわいた
	既習学習の想起 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・援助技術を思い出すことができた
	想定して捉える必要性 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者に対しての想像力、様々な患者の状況の想定を行う必要性を感じた
	想像力 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・想像力がつくと思った
実習への原動力 (41)	実習への動機付け・心構え (16)	<ul style="list-style-type: none"> ・何が不足で、何の情報を得たいのか明確になった ・その人の全体像を考えることができ、実習への心構えができた
	学習意欲の向上 (19)	<ul style="list-style-type: none"> ・頑張ろうという気持ちになり意欲が増した ・まだ不安だけど、イメージがついたことによって頑張ろうと思えるようになった ・実習に向けての意欲がわいてきた
	受け持ち患者への興味関心 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・想像しながら演習することで、相手のことを知りたいと思うようになった
	自信 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな患者さんでも臨機応変に対応することができるのではないかと自信を持てた
自己学習の深まり (29)	自己の学習課題の明確化 (26)	<ul style="list-style-type: none"> ・何が課題で不足な知識は何なのか分かった ・自分自身の学習の不足部分やもう少し学びたいという所が分かった ・受け持ち患者の情報を踏まえた病態整理の確認や、想定をして技術演習を行うと自分の課題（分からない点）が明確になり、自己学習しやすい
	自己学習の深まり (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習が深まった
実習に向けた心の準備 (6)	ケアのイメージ化による不安の軽減 (4)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者へどのように接し、援助を行うのがよいのかが分かり不安が軽減された
	受け持ち患者と出会うことへの緊張感 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・患者との出会いに対し不安や緊張が出てきた
	責任感 (1)	<ul style="list-style-type: none"> ・実習が始まる、患者さんを受け持たせていただくという責任感が出てきた
対象を捉えようとする力 (5)	対象理解 (3)	<ul style="list-style-type: none"> ・紙からの情報だけでなく自分で考える事が患者理解につながったと思った
	高齢者の特徴を捉える視点 (糸口) (2)	<ul style="list-style-type: none"> ・疾患だけでなく、機能や認知、精神面などについても実習前から考えるきっかけになった

2. 実習終了後、演習が実習全体にどう活かされたのかや気持ちの変化（表4）

【イメージと実際のギャップからの学び】【イメージを活用したケアの実践】【演習経験の実習での活用】【心構え・意欲】【事前学習への取り組み】

【高齢者とのコミュニケーションへの活用】の6つのカテゴリーが抽出された。

【イメージと実際のギャップからの学び】では、「実際に患者を見てみないと分からない事が多かった」など、『事前の情報だけでは状態を把握し

表4 実習終了後、演習が実習全体にどう活かされたのかや気持ちの変化（総件数：87）

カテゴリー	サブカテゴリー	レポートへの記載内容
イメージと実際のギャップからの学び (30)	事前の患者情報だけでは状態を把握しきれない思い (10)	・実際に患者を見てみないと分からないことが多かった ・患者のイメージをつかむことはできるが、患者に会わなければADL状況も状態も分からない ・実際の患者さんで行うのと所要時間も全然違った
	対象理解 (9)	・イメージした患者と実際にお会いした患者との相違点を知ること で、より深く受け持ち患者の状態を知り、理解することができた ・広い視点を持って関わることで、患者理解につなげる事ができた
	ギャップを埋めるための行動 (5)	・患者の状況とのズレをうまく修正しつつ、演習を基盤にして行うことができた。
	学習方法の習得 (4)	・ADLの状況から援助方法について考える過程を演習したことで、病棟でも自分で考え実践するという事が身についていた
	個性への気づき (1)	・個性について考えるきっかけになった
	実習に向けての気持ちの切り換え (1)	・演習と実際は全く別だったが実習を行うことへの気持ちの切り換えに役立っていた
イメージを活用したケアの実践 (29)	イメージしながら実践するケア（看護の視点、援助方法、関わり） (18)	・患者のイメージを膨らませて、疾病や援助を考えることができた ・実際に受け持った時具体的な援助や関わりをすることができた ・事前に演習することで、イメージや視野を広く持つことにつながった ・実際に援助を行う際イメージしやすく、ポイントや留意点に配慮したり、根拠を意識したケアにつながったと思う
	実習へのスムーズな導入 (7)	・患者のイメージが付き、スムーズに実習が開始できた ・想定していたことと変化はあったものの基盤がしっかりできていたのでスムーズに実習を行うことができた
	気持ちへの配慮 (2)	・患者の気持ちを考えて行うことができた
	自信 (1)	・事前に演習で行ったものに関しては自信を持って行うことができた
	想像 (1)	・大まかな部分ではあるが想像できた
演習経験の実習での活用 (12)	演習経験の実習での活用 (6)	・演習で行った車椅子移乗を臨床でも活かすことができた ・学内演習で行った援助内容について患者役の学生からの意見を 実習でも生かすことができた
	基本的な援助技術の復習 (4)	・演習で想定した患者さんよりも実際はもっと自立している方 であった。そのため演習通りには行うことができなかったが、車 いすの位置、基本的な援助方法も復習できた
	その人を捉える視点の明確化 (2)	・様々なことを統合して患者を捉えることが必要
心構え・意欲 (11)	心構え、意欲 (10)	・実習に挑む前の心構えができた ・実習前に情報をもらい、演習していくことで患者の状態のイメ ージと現実には差はあっても、注意点など基本的な項目を学ぶ機 会になるので、心構えが強く持てた
	心のゆとり (1)	・一度、援助練習を行っていたため、気持ちに余裕はあった。そ のため、実際に患者と関わりの中で、冷静に観察・判断し援助 を行うことができた
事前学習への取り組み (4)	事前学習の準備 (3)	・事前に行うという意識付けが強くなった
	疾患の理解 (1)	・疾患を理解することで、アセスメントの展開がしやすくなった
高齢者とのコミュニケーション (1)	高齢者とのコミュニ ケーション (1)	・コミュニケーションに関して加齢による変化、疾患による影響 について十分考え会話することができた

きれない思い』(10件)を抱きつつも、「イメージした患者と実際にお会いした患者との相違点を知ること、より深く受け持ち患者の状態を知り、理解することができた」など『対象理解』(9件)や『個別性への気づき』(1件)につなげることができていた。「患者の状況とのズレをうまく修正しつつ、演習を基盤にして行うことができた」など『ギャップを埋めるための行動』(5件)をとることができた学生や、「ADLの状況から援助方法について考える過程を演習したことで、病棟でも自分で考え実践するという事が身に付いてできた」など一連の演習を『学習方法の習得』(4件)に発展させた学生もいた。「演習と実際は全く別だったが、実習を行うことへの気持ちの切り替えに役立っていた」という『実習に向けた気持ちの切り替え』(1件)に役立った学生もいた。

【イメージを活用したケアの実践】では、「事前に演習することで、イメージや視野を広く持つことができた」、「患者のイメージを膨らませて、疾病や援助を考える事ができ、実際に受け持ったとき具体的な援助や関わりをすることができた」など、『イメージしながら実践するケア(看護の視点、援助方法、関わり)』(18件)ができていた。また、演習を実施したことで「患者のイメージが付き、スムーズに実習が開始できた」など『実習へのスムーズな導入』(7件)となり、「患者の気持ちを考えて行うことができた」など『気持ちへの配慮』(2件)にもつながっていた。患者を『想像』(1件)し、演習したことが『自信』(1件)につながった学生もいた。

【演習経験の実習での活用】では、「演習で行った車椅子移乗を臨床でも活かすことができた」など『演習経験の実習での活用』(6件)ができた学生や、「演習通りには行うことができなかったが、車椅子の位置、基本的な援助方法を復習できた」という『基本的な援助技術の復習』(4件)として役立てた学生もいた。また、「様々な事を統合して捉えることが必要」と『その人を捉える視点の明確化』(2件)につながった学生もいた。

【心構え・意欲】では、「患者さんのイメージと、実際の患者さんは異なる部分が多かったが、このような物品や援助が必要となるだろうと想定して行うことができ、心構えができた」など、実習に向けての『心構え・意欲』(10件)や、『心のゆとり』(1件)につながっていた。

【事前学習への取り組み】では、「少ない情報からどんな状態かを想像して実習に励むことで、事前学習をしっかりと行うことができた」「疾患を理解することで、アセスメントの展開がしやすくなった」など『事前学習の準備』(3件)や『疾患の理解』(1件)につながっていた。

VI. 考察

1. 演習終了直後の学習効果

【イメージすることにより広がる看護の視点】【実習への原動力】【自己学習の深まり】【実習に向けた心の準備】【対象を捉えようとする力】の5カテゴリーにまとめることが出来た。

【イメージすることにより広がる看護の視点】では、受け持ち患者に関する情報用紙を基に、疾患に関する学習に加え、ADLの状態に合わせた様々な援助パターンをイメージすることが出来ていた。これは、ADLの状態を読み取り、患者像をイメージしていくプロセスにおいて、平面的だった情報を立体的に捉えることができたことを意味するものと考ええる。また、患者役の学生に受け持ち患者の状況を説明し相互に確認することで、援助方法の創意工夫した取り組みや、予測されるリスクの視点を学習することにつながっていたと考える。

【実習への原動力】では、単に援助場面を実施するのではなく、ロールプレイによる患者像の具体化が動機付けとなり、ケアへつなげるための情報収集の視点が明確になったと考える。更に、具体的な接し方や配慮・留意点を踏まえた実施が、これならできるかもしれないという自信や、頑張ろうという学習意欲の向上につながったといえる。このような、まだ見ぬ患者への興味関心の高まりや自信、学習意欲の向上は、能動的な姿勢で実習に臨むための原動力となると考えられ、自分自身で獲得できたことを認識できることが重要と考える。

【自己学習の深まり】では、受け持ち患者に対する看護をイメージし実践することで、不足している知識や自己の学習課題が明確になっていた。これは、実演後に患者役の学生と相互に評価をすることで、自分では気付かなかったケアの視点がフィードバックされ、学習内容の焦点化や学習の必要性を自覚したためと考える。

【実習に向けた心の準備】では、予め与えられたシナリオの演習ではなく、実際に受け持つ患者

の情報から学生自ら援助場面を設定し実施したことが、自信や翌日から始まる病院実習への適度な緊張感、受け持たせていただくという責任感といった気持ちの準備性につながったと考える。

【対象を捉えようとする力】では、疾患だけでなく、対象の身体機能や認知、精神面などについても捉えるきっかけとなっていた。患者の状態を自分で考えるという能動的な学習が、高齢者の特徴を踏まえた実践的な患者の捉え方につながったといえる。

2. 実習終了後の学習効果

【イメージと実際のギャップからの学び】【イメージを活用したケアの実践】【心構え・意欲】【演習経験の実習での活用】【事前学習への取り組み】【高齢者とのコミュニケーションへの活用】の6つのカテゴリにまとめることができた。

【イメージと実際のギャップからの学び】では、事前に提供される限られた情報から患者をイメージすることへの限界と、実習で直接出会わなければ患者やADLの状態を理解することができないというギャップを感じていた。対象理解は、実習の方がより明確になると再認識すると同時に、実際に自分自身で観察し捉えていくことの重要性を学ぶことができていた。そして、実際とイメージとの相違点を整理することで、そのズレの意味付けやズレを解消するために必要な情報を追加・修正するといった能動的学習行動の動機付けになったと考える。

【イメージを活用したケアの実践】では、受け持ち患者をイメージしながら取り組む演習は、具体的な看護実践や実習へのスムーズな導入となっていた。既習学習を基に対象の個別性に合わせた看護を実践する中で、実習中も自分自身の看護を振り返りながら実施した結果と考えられ、演習の成果が現れていたと推察される。

【演習経験の実習での活用】では、山田ら⁶⁾が実習中に演習の状況と似た場面に出会った場合は、演習を活かした看護実践が出来ると報告しているように、演習経験を活用することが出来ており、更に演習で設定した状況以外に応用した学生もいた。

【心構え・意欲】では、自分のイメージと実際とにギャップが生じていても、受け持ち患者を想定しながら留意点を踏まえて事前に行うということが心構えや心のゆとりにつながっていた。実習前

段階の演習として受け持ち患者への援助を想定したように、実習中の受け持ち患者との関わりにおいても同様に、日々の援助計画を考える場面で活用することが出来たと思われる。

【事前学習への取り組み】では、事前学習の準備や疾患の理解がアセスメントの展開のしやすさにつながっていた。受け持ち患者に関する情報という限られた情報だからこそ、様々な状況を考えながら既習学習を活用しようという取り組み姿勢がみられ、更に事前学習をしてから実習に臨むという学習準備の必要性や疾患の理解がアセスメントの展開に影響を及ぼしたと考える。

【高齢者とのコミュニケーションへの活用】では、加齢による変化や疾患による影響を踏まえたコミュニケーション方法が取れていた。受け持ち患者の年齢や身体的特徴から、加齢による変化や機能障害の状態を踏まえた看護実践を認識したためと思われる。

3. 演習終了直後と実習終了後の学習効果の比較

演習終了直後と実習終了後の学習効果を比較すると、演習終了直後の【イメージすることにより広がる看護の視点】【対象を捉えようとする力】と実習終了後の【イメージを活用したケアの実践】、演習終了直後の【実習への原動力】【実習に向けた心の準備】と実習終了後の【心構え・意欲】、演習終了直後の【自己学習の深まり】と【事前学習への取り組み】は、学習効果の共通要素として捉えることが出来る。これらの内容は、演習場面の一時的な学習効果に留まらず、実習終了時まで継続されていたものといえる。演習では、援助の一場面を想定して実演しているが、学習プロセスの中で他の援助場面や状況ではどのようなケアが出来るかといった能動的な学習姿勢が実習中においても効果をもたらすと考える。

また、実習終了後の【イメージと実際のギャップからの学び】【演習経験の実習での活用】【高齢者とのコミュニケーションへの活用】は、実習をしなければ学ぶことが出来ない学習内容といえる。患者を捉えるためにはどうしたらよいのかを演習と実習を対比させ、自分自身の看護を振り返りながら自己の学習課題に向かって看護実践をとおして得られた効果と推察される。

VII. まとめ

受け持ち患者に関する情報を活用した演習は、

結果・考察から概ね成果が得られたといえる。また今回の演習で実施した、受け持ち患者に関する情報用紙から援助場面を設定し、演習・評価・学習課題を明確にするという一連のプロセスは、想定した条件以外の援助の可能性を探る思考や行動力の向上にもつながったと考える。

更にその他の成果として、学生同士でロールプレイを実施し相互に評価をすることで、患者を演じながら看護者としての視点を持つという援助される側とする側の両者の立場から場面を捉えることが出来ていた。自分の援助は対象にとってどうであったのかと自分の看護を振り返ることにつながると考えられ、よりよいケアの発展に向けた動機付けになると期待できる。

また、レポートへの記載はないが、演習でのコミュニケーションにおいては、方言やゆっくりとした会話表現を取り入れて患者役を演じる学生もいた。老年看護学実習は施設実習と病院実習が連続しているため、施設で生活している高齢者から直に体験し学んだ学習成果を演習でのコミュニケーションに取り入れることが出来たと考える。

VIII. 今後の課題

受け持ち患者に関する情報を活用した演習の成果として、レポート記載の内容から演習の目的・目標は概ね達成したといえるが、高齢者の看護という視点の学びは少なかった。このことは、演習の目的・目標に高齢者理解を意味する内容が含まれていないことや、受け持ち患者の状況を想定する際、疾患による機能障害に視点が偏り、加齢による認知機能や視覚・聴覚といった感覚機能の変化、病気や障害を持つ高齢者の心理を実感しがたい状況であることが理由と考える。

今後は、高齢者の看護という視点での学びを引き出すために、高齢者に共通する視点を理解出来るような工夫が必要である。そのためには、対象の特性を更に明確にし、リアリティを高めていくなど演習環境を整えていくことが課題といえる。具体的には、眼鏡や耳栓を使用した感覚機能の低下の実感や、錘やサポーターを使用して麻痺や運動機能の低下を想定するなど、装具等を活用した演習内容にするなど、演習効果を高めるための積極的な取り組みをしていきたい。

本研究は、日本老年看護学会第17回学術集会で一部報告している。

文 献

- 1) 上西洋子・佐藤都也子・山内恵美：在宅看護論にロールプレイングを取り入れた教授方法の検討，日本看護学会論文集 地域看護 29, 154-156, 1998.
- 2) 村田日出子：老年看護学におけるリアリティある看護過程演習の検討－模擬患者とロールプレイを導入して－，日本看護学会論文集 看護教育 34, 82-84, 2003.
- 3) 鷹居樹八子・中尾理恵子・門司和彦他：在宅看護論実習前のロールプレイにおける看護内容評価と教育的効果，長崎大学医療技術短期大学部紀要 14(1), 111-116, 2001.
- 4) 中野雅子・伊藤良子・徳永基与子：看護学生間の演習における看護師役・患者役体験の学びと課題，京都市立看護短期大学紀要 35, 101-107, 2010.
- 5) 臼井えみ・宇佐見規子：老年看護学実習オリエンテーション方法の工夫－実習前・後の老年看護に対する看護学生の意識変化について－，日本看護学会論文集 老年看護 38, 276-278, 2007.
- 6) 山田正実・今泉香里：学生の演習と実習の体験から家族援助に関する学習支援を考える，日本看護学会論文集 看護教育 37, 443-445, 2006.